



リレーエッセイ

ハードルを越えて

とみ みつ まさ ひろ
富満 雅博さん
(霧島市)



今年で60歳になります。小児マヒで体の自由が利かずに、小学校には1年遅れで入学しました。幼少の頃はうまく歩くこともできませんでしたが、母親が必死に歩行訓練に付き合ってくれたおかげで、小学校3年生の頃にはなんとか自分の足で通うことができるようになりました。当時は特殊学級や養護学校などもなかったため、同級生と同じ教室で、同じ授業を受けました。歩けるようになるまでは、毎日母親がおんぶをして学校に連れて行ってくれ、授業も僕の隣で一緒に受けました。みんなと同じ授業内容にはついていくことが出来なかったため、母親と僕の手を紐で結んで文字を書く練習をしました。

自分の足で学校に通えるようになると、クラスの友達が「僕たちが面倒をみるから、お母さんは安心して家にいていいよ」と言ってくれました。当時の級友とは今も交流があり、還暦旅行の誘いもありました。子供の頃からずっとよくしてくれる大切なクラスメイトです。

47歳の頃、ふたたび足腰が弱ってきて歩けなくなったために、現在は自宅での療養を続けています。趣味は俳句とアマチュア無線です。無線の試験は年に1回ですが、無線工学や法規などを独学で勉強して3回目の試験でようやく合格することができました。無線の交信相手は日本だけでなく、ブラジルやモンゴル、上海、マレーシアなど。南極の昭和基地と無線で交信して話をしたこともあります。

もうひとつの趣味は俳句です。俳句のテーマは様々ですが、デイサービスに向かうバスの中から見える風景を詠むことが多いですね。バスからの眺めというのは、普段の車椅子からの視線とは違って、まわりの景色がとても新鮮に見えます。たとえば「新茶畑から ジャンボ機の 昇りけり」や、「雪を脱ぐ 高千穂の峰 おとこまえ」、「夕暮るる 小川ほたるの 豆電球」など。また、母と一緒に学んだ小学生時代を回想して詠んだ「母と僕と 一緒にもらった 卒業証書かな」という俳句も詠みました。俳句は、ひらめきやアイデアを大事にして、浮かんだ言葉をリズムよく並べるように詠むことが大切です。一度、卒業した小学校に行って、生徒たちに俳句を教えたことがありました。人前に出て話をするには得意ではありませんが、障害に負けずにいろいろなことにチャレンジする姿を見せることで、子供たちになにかを感じてもらえるとうれしいです。



自宅の前には大きな無線用アンテナを設置し、海外との交信も可能



無線機を操作して交信を呼びかける富満さん

